

「 渡 育 2 4 0 号 」 の 特 性 概 要

北海道立道南農業試験場
研究部作物科

1. 特性一覧表

系統名	渡育240号	交配組合せ：空系90242B* / 上育418号(ほしのゆめ)		
特 性	長 所 1. 良食味で低タンパクである 2. 障害型耐冷性が強い	短 所 1. いもち病抵抗性がやや弱い 2. 粒厚が薄い		
採用予定県および普及見込み面積	北海道 800ha			
調 査 地	道南農業試験場			
調査年次	平成11～14年(中苗標肥)			
系統・品種名 項 目	渡育240号	対 照 きらら397	比 較 ほしのゆめ	比 較 ななつぼし
出穂期の早晩性	晩生の中	中生の早	中生の早	中生の早
成熟期の早晩性	晩生の早	中生の中	中生の早	中生の中
草 型	穂数	穂数	穂数	偏穂数
出穂期(月日)	8. 3 (8. 5)	7.31 (8. 2)	7.29 (7.31)	7.31 (8. 2)
成熟期(月日)	9.23 (9.21)	9.22 (9.18)	9.18 (9.15)	9.20 (9.18)
登熟日数(日)	51	53	51	51
稈長(cm)	73	69	72	74
穂長(cm)	16.1	15.8	15.2	16.2
穂数(本 / m ²)	634	599	655	584
一穂籾数	49.0	51.8	50.3	52.5
割籾歩合(%)	14.8	16.1	31.9	22.6
芒の多少・長短	少短	稀短	少短	少短
ふ先色	黄白	黄白	黄白	黄白
脱粒性	難	難	難	難
耐倒伏性	中～やや強	中～やや強	やや弱～中	やや弱
穂ばらみ期耐冷性	強	やや強	強	強
開花期耐冷性	極強	やや強	やや強	強
いもち病抵抗性	遺伝子型 Pia、Pii、Pik 葉いもち やや弱 穂いもち やや弱	Pii、Pik やや弱 中	Pia、Pii、Pik 弱 やや弱	Pia、Pii やや弱 やや弱
玄米重(kg / a)	54.4	55.7	51.8	54.8
玄米重標準比(%)	98	100	93	98
玄米千粒重(g)	22.3	22.1	21.3	21.5
玄米等級	1下	2上	2中上	1下
玄米品質	中上	中上	中上	中上
食 味	上下(0.21)	中上(-0.38)	上下(0.00)	上下(-)
タンパク含量(%)	6.1	6.6	6.4	6.4
アミロース含量(%)	19.0	18.8	19.2	18.3

注 1) *空系90242B：空系61060 / 上育397号(きらら397)、空系61060：国宝ローズ / 空育114号(ゆきひかり) // 空育99号。
 2) 出穂期、成熟期の()：普及見込み地帯の奨決現地試験、平成12～14年の標肥のべ10カ所(成熟期は9カ所)の平均。
 3) 障害型耐冷性：穂ばらみ期耐冷性+開花期耐冷性(平成13、14年上川農試・人工気象室検定結果)。
 4) 食 味()：平成12～14年の育成地の産米を同一条件で食味した時の「ほしのゆめ」対比の総合評価値。

2. 「渡育 240 号」の特記すべき特徴

「渡育 240 号」は晩生の良質粳系統で、耐冷性が強くタンパク含量が低く良食味である。

3. 奨励品種に採用しようとする理由

道南南部は、気候が温暖で秋が長く農耕期間が長いため、平成 4 年まで水稻の作付けは「ほのか 224」等の晩生種が 50 % 以上を占めていた。しかし「きらら 397」「ほしのゆめ」の普及により中生種の作付けが多くなり、平成 14 年度の作付け比率は「きらら 397」が 3,425ha で全体の 79 %、次いで「ほしのゆめ」が 801ha で 19 %とこれら中生 2 品種で 98 %を占めている。特に「きらら 397」は北海道米としてネームバリューが高く、収量性があるため作付け比率が高く、優良品種地帯別作付基準を大幅に超え、かなりの過作となっている。一方「ほしのゆめ」は「きらら 397」に比べ食味は優るものの、粒厚が薄く収量性が劣るため作付けが減少傾向で、今後も「きらら 397」の過剰作付けが予想される。

このような「きらら 397」の作付け偏重は、「きらら 397」の耐冷性が奨励品種の中では劣ることから、冷害のリスクを増加させ、農家経営を不安定にする要因となっている。また道南南部の稲作農家は、経費削減のため 1 台のコンバインを複数の農家で共同利用している場合が多く収穫期が競合し、刈り遅れによる産米の品質低下や食味劣化を招いている。さらに道南南部の稲作は複合経営が主体で、他の作物と農作業が競合することから、適期収穫が一層困難となっている。このような中生品種に過度に偏重した品種構成を是正し、危険分散・熟期分散を図るために道南南部に適した晩生品種が強く求められている。

「渡育 240 号」は、熟期が「きらら 397」よりも遅い晩生種で、食味が「きらら 397」に明らかに優り、「ほしのゆめ」並からやや優る。また耐冷性が「きらら 397」より強く、収量はほぼ「きらら 397」並で「ほしのゆめ」に優る。

従って「渡育 240 号」を「きらら 397」の一部に替えて普及することにより道南南部の米の品質・食味を向上させ、その生産の安定と販路の拡大を図る。

また道南の“売れるコメ作り”を推進する上で、「渡育 240 号」を道南独自のコメブランドとして位置づけ、「地産地消」の具体的な差別化商品とすることにより、道南農業の振興に寄与できる。

4. 普及見込み地帯および対照品種

1) 栽培地帯 檜山南部、渡島中・南部及びこれに準ずる地帯

2) 対照品種 「きらら 397」の一部

5. 普及見込み面積 北海道 800ha

6. 栽培上の注意

1) いもち病抵抗性がやや弱いので、その発生に注意し適正防除に努める。

2) 倒伏や干ばつにより粒厚が薄くなることがあるので、多肥栽培は避け「施肥標準」を厳守し、登熟期の水管理に留意する。

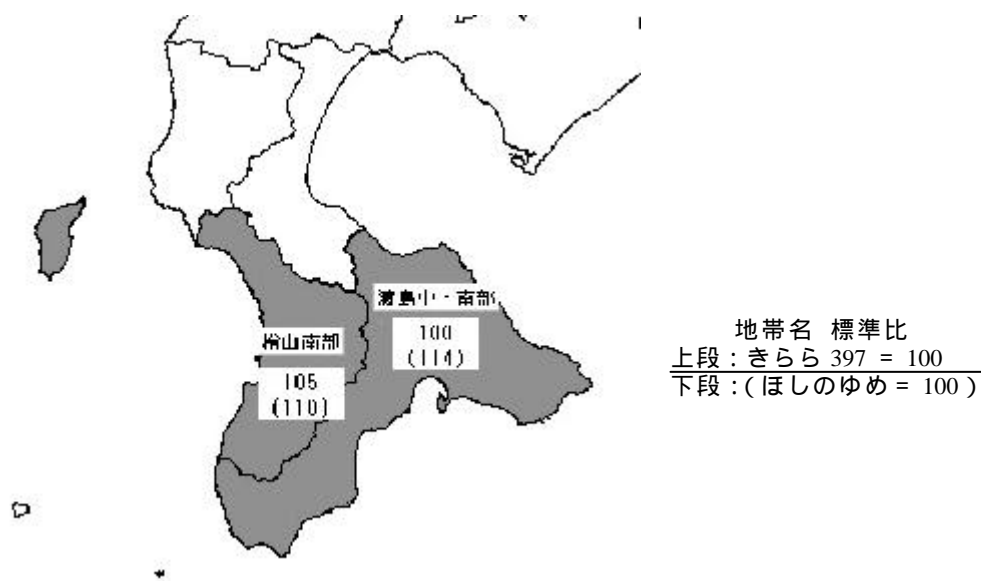


図 「渡育 240 号」の普及見込み地帯における玄米収量比
(平成 12 ~ 14 年の 3 力年の標肥・多肥込みの平均)